

## 第 1 回高等学校改革プラン推進委員会（第二推進委員会）議事録

- 1 日時 平成 17 年 5 月 29 日（日）午後 2 時 00 分～午後 4 時 00 分
- 2 場所 長野県庁 西庁舎 402、403 号室
- 3 出席委員

飯島 俊勝委員長	宮阪 義彦委員
佐藤 元太郎副委員長	荻原 拓次委員
芹澤 勤委員	滝澤 清登委員
遠山 順孝委員	中沢 裕委員
小林 将喜委員	西村 廣一委員
太田 節委員	市川 久由委員
和泉 碩也委員	原 貞次郎委員

### 4 開会

（植松主任教育支援主事）

それでは時間になりましたので、ただ今から、第 2 通学区の高等学校改革プラン推進委員会を開催させていただきます。

私は、第 2 通学区の推進委員会を担当させていただいています高校教育課、高校改革プラン推進ユニット、主任教育支援主事、植松と申します。よろしくお願いいたします。本日は、委員長の選任までの間、司会を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

本日の閉会は、4 時ごろを予定してございます。なお、本日このあと、委員長を選任したあと、委員長と事務局の打ち合わせのため 5 分間ほど休憩を取らせていただきたいと思います。あらかじめご了承くださいと思います。

それでは今回、第 1 回目ということでございますので、委員の皆さまに自己紹介をお願いしたいと存じます。それでは、芹澤委員さまのほうから、早速。

（芹澤委員）

小諸市長の芹澤勤といたします。よろしくお願いいたします。

（遠山委員）

立科町長の遠山順孝です。どうぞよろしくお願いいたします。

（小林委員）

東御市教育委員長の小林将喜です。よろしくお願いいたします。

（佐藤委員）

軽井沢町の教育委員長の佐藤元太郎です。よろしくお願いいたします。

（太田委員）

上田市の大屋にございます東京特殊電線、東特（トウトク）という名前で通っておりますけれども、太田でございます。電線、ケーブル、それからテレビ部品等々、電飾品製造・販売をしている会社でございます。よろしくお願いします。

（和泉委員）

格式でございます双信電気の和泉と申します。よろしくお願いします。

（飯島委員）

長野県保育園連盟の会長を仰せ付かっています飯島と申します。上田市で芙蓉保育園園長をしております。よろしくお願いします。

（荻原委員）

荻原拓次と申します。今日は、元野沢北のPTA会長ということで、出席させていただいておりますけれども、佐久市中佐都というところで造り酒屋をやっております。よろしくお願いします。

（宮阪委員）

依田窪南部中学校保護者という立場ですが、宮阪と申します。よろしくお願いいたします。

（滝澤委員）

上田市からまいりました滝澤と申します。よろしくお願いします。上田高等学校の保護者という立場で来ております。よろしくお願いします。

（中沢委員）

佐久市にあります野沢中学校長の中沢裕と申します。よろしくお願いします。

（西村委員）

小諸高等学校の学校長をしています西村廣一と申します。よろしくお願いします。

（市川委員）

真田中学校、市川です。よろしくお願いします。

（原 委員）

小諸商業高校の原と申します。現在、小諸商業の定時制に勤務しています。本委員会の大変重要な会の委員に委嘱され大変責任を重く感じていますが、十分な議論を行いたいと考えております。よろしくお願いします。

(植松主任教育支援主事)

ありがとうございました。

続きまして、委員長の選任をお願いしたいと存じます。委員長の選任につきましては、高等学校改革プラン推進委員会の設置要綱の第5条にございまして、その資料にもございます。推進委員会は委員長を置き、委員が互選するという規定になっております。こんなことでございますが、いかがでしたらよろしいでしょうか。

(西村委員)

よろしいですか。

(植松主任教育支援主事)

はい。

(西村委員)

自治体関係とか、それから学校関係というのは、少なからず、若干しがらみが多分あると思いますので、なかなかやりにくいのではないかなと思います。よって、有識者の方で、飯島委員さまを、ぜひ私は、ご推薦を申し上げたいと思いますけれども、いかがでしょうか。

(植松主任教育支援主事)

ただ今、西村委員さんのほうから、飯島委員さんに委員長を就任していただいたらというご発言がございましたが、皆さまいかがでございましょうか。

(全員)

はい、いいです。

(植松主任教育支援主事)

はい、ありがとうございます。

それでは、飯島委員さまに委員長をお願いしたいと存じます。それでは、飯島さまにおかれましては、委員長席のほうへご移動をいただきますよう、お願いしたいと存じます。

それではここで、打ち合わせのため、5分ほど休憩の時間を取らせていただきたいと思います。2時16分ぐらい、ちょっと中途半端な時間でございますが、そのあたりで再開をいたしたいと存じますので、しばらくお待ちくださいますよう、お願いいたします。

【休憩後再開】

（植松主任教育支援主事）

大変お待たせいたしました。それでは、ただ今より会議を再開いたしたいと存じます。

それでは飯島委員長さんのほうから、ごあいさつをお願いいたしまして、引き続き会議のことを進めていただけたらと存じます。よろしくお願いいたします。

（飯島委員長）

図らずも、この委員会の委員長に推薦をいただきました。長野県保育連盟の会長をしています飯島と申します。

こういう席は、大変不向きの間人でありますけれども、推薦をいただいた以上は、先ほども全体会議のいろいろ説明がありました報告に沿って、委員の皆さんのご意見を十分に反映できるよう委員会を運営していきたいと、思っております。よろしくご協力のほどお願い申し上げます。簡単でありますけれども、ごあいさつとさせていただきます。

それでは、引き続き事務局のほうからご用意された順番にのっとりまして、委員会を進行させていただきたいと思ひます。なお、先ほどの高等学校改革プラン推進委員会の設置要綱の中の、委員長等というところの第5条の第3項です。副委員長は、委員長が委員のうちから指名すると書かれております。大変僭越でありますけれども、こちらからご指名をさせていただこうと思ひます。先ほども、私を推薦していただいたときの言葉にありましたが、識者の中から2人ということも何かと思ひますし、学校関係者は、大変だろうと思ひますから、自治体および地域関係者の中から、軽井沢町の教育委員長さんであります佐藤委員にお願いしたい、そんなふうに思ひわけですけれども、いかがでしょうか。

【拍手】

（全員）

よろしいです。

（飯島委員長）

よろしくお願いいたします。

（佐藤副委員長）

では、及ばずながら、委員長さんのお手伝ひをさせていただきます。よろしくお願いいたします。

（飯島委員長）

ありがとうございます。それでは、副委員長のほうからごあいさつをいただいたということで、よろしいでしょうか。

（佐藤副委員長）

結構です。あいさつこれで。

( 飯島委員長 )

そうですか。

( 佐藤副委員長 )

委員長さんにできるだけ出席していただいて、委員長が欠席の場合は、副委員長ということでございますが。

( 飯島委員長 )

よろしくどうぞ、お願いいたします。

( 佐藤副委員長 )

いろいろとお手伝い申し上げます。

( 飯島委員長 )

それでは、このあと、次第に沿って進めさせていただこうと思います。

本日の日程は、このあと、事務局において用意していただきました資料について、説明をお願いしたいと思います。

## 5 資料説明

( 植松主任教育支援主事 )

それでは資料の説明でございますが、資料の説明に入る前に、委員長に1つ、皆さんにお諮りをいただきたいことがございますので、お願いいたします。

当推進委員会、原則的には、すべて公開ということできたいと考えております。つきましては、この会を「公開で」ということでさせていただくことにつきまして、また、内容につきましても、議事録として公開をしていきたいと考えておりますので、この件につきましても、委員の皆さまにお諮りをいただければと存じます。よろしくお願いいたします。

( 飯島委員長 )

会議に入る前に、今、事務局のほうから、この推進委員会を公開で行い、内容については、議事録として公開をしていきたいという旨のご発言がございましたが、委員の皆さんにおかれましては、何かご意見がございますでしょうか。

それでは、事務局の提案どおり公開とし、併せて議事録も公開をするということで、よろしいでしょうか。

( 全員 )

はい。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

それでは、この件につきましては、委員の皆さまのご賛同をいただきましたので、そのようにお願いいたします。それでは改めまして、事務局から資料の説明をお願いいたします。

## 5 資料説明

(植松主任教育支援主事)

ありがとうございました。

それではご資料のご説明に入りたいと思います。資料のご確認をしていただければと思いますが、お手元にご用意いたしました資料でございますが、資料7から用意してございます。資料7、1枚でございます。それから資料8、地図のものでございます。それから資料9、表になっているのものでございます。それから資料10、やはり表になっているものでございます。それから資料11、1枚のもの、やはり表になっているものでございます。それからもう1つ、ちょっと厚くて重たいものでございますが、ファイルにとじましたものがございまして、東信地区の高等学校の学校要覧をご用意いたしまして、とじさせていただきます。少し詳しくお話しさせていただけたらと思います。資料は、よろしいでございましょうか。

それでは資料の順に従いまして、ご説明をさせていただきたいと思います。まず、資料の7をご覧ください。高等学校改革プラン推進委員会への検討依頼事項についてというものでございます。5月の定例会で決定をされました各通学区の学校数の目安の資料でございます。

若干、表の見方につきまして、ご説明させていただきたいと存じます。左側のほうにずっと平成2年から、右のほうへ平成31年まで、年度ごとにずっと数字が入ってございますが、この分につきまして、最初にご説明をさせていただきたいと思います。この二重線左側の部分が、区別中学校卒業者数および推定募集学級数の推移というものでございまして、年度ごとに高校の旧12通学区のそれぞれごとに集計をしてございます。例えば、一番上が分かりやすいかと思いますが、第1区というところをちょっとご覧をいただきますと、第1区のところを横に見ていただきますと、色の付いている部分、網掛けになっている部分がございまして、平成2年が721人。その右は、ちょっと飛びますが、14年の596人、545人と、並んでいる数字でございまして、これが第1区、飯山のほうですが、第1区の中学校卒業者数でございます。人数を表しております。それがずっと右のほうへ並んでございます。

それから、その下の欄でございまして。平成2年という欄がございまして、同じ1区で見させていただきますと、平成2年は当然、100ということにございまして、これを100としたときに、平成14年の段階では82.7%という、減っているということを比で表してございます。それから15年、16年と75.6%、63.0%、72.0%というように推移を表してございます。

それから3番目、その下の欄でございまして、募集学級数という欄になっておりまして、この第1区の学校全体、この区にある学校すべてのその年度の募集学級数の合計を表して

おります。平成 2 年でいきますと、16 ということですので、この地区の学校全部で 16 学級分の募集があったということでございます。この数字も右のほうへご覧いただければいいと思います。ただし、この募集学級数でございますが、平成 17 年度までは、もう既に実際に実施したものでございますので、実際の数になってございますが、平成 18 年以降につきましては、推定募集学級数となっております。まだ 18 年度の募集枠が決定しておりませんで、こちらのほうで 14 年から 17 年までの数値を基にいたしまして、推定をした数字ということでございますので、これはもちろん決定ではなくて、あくまで推定をしたということでございますので、そういうことでご覧をいただければというふうに思います。そうしますと、東信地区第 2 通学区は、第 5 区と第 6 区ということでございますので、その欄をご覧いただきますと、第 5 区のところは、上田を中心とした上小地域ということでございますが、平成 2 年は 3,262 人という数字でございます。それから、その下第 6 区、小諸、南北佐久地域のところでございますが、3,114 人という、それは平成 2 年の数字ということでございまして、それをずっと右のほうへ見ていただくと、流れがお分かりになると思います。

例えば平成 17 年のところで見ていただきますと、平成 17 年度ですと第 5 区のほうは、生徒数 2,154 人、それから平成 2 年比で 66.0%、それから募集学級数は 46 ということでございます。それから第 6 区につきましては、生徒数 2,362 人、平成 2 年の比で 75.9%、募集学級数が 51 ということになっております。それから一番右が平成 31 年までございまして、平成 31 年までいきますと第 5 区ですと、中学卒業生の数が 1,700 人にまで減ってまいります。それから平成 2 年の比で 52.1%、募集学級は推定募集学級 36 ということでございます。それから第 6 区につきましては、生徒数が 1,924 人。それから平成 2 年比で 61.8%、推定募集学級数 41 という数字になっているということでございます。以上が二重線より左側のことについて、表のご説明をいたしました。

それから 31 年の欄の右側、二重線から右側をご覧いただければと存じます。この部分が検討依頼事項にかかわる部分でございまして、左側の今、ご説明いたしました数字の中からの検討をお願いするところへかかわってるところでございますが。

まず 1 番左側からご覧いただきますと、現在の校数ということでございまして、第 5 区、第 6 区と合わせた第 2 通学区ですと、17 という数字がございしますが、これは現在の東信地区の県立高校の数でございます。それに対しまして、その右側の欄でございますが、基準に基づく数、通学区ごとの学校数、全日制、ということでございまして、この部分が 15 という数字が入ってございます。これが東信地区に目安としてお示しいたしました 15 校という数字がこれでございます。それからその右に多部制・単位制という欄がございまして、1 という数字でございます。この 1 校ということにつきましては、先ほど全体会の会場でも課長のほうからの説明にもございましたが、各通学区に、多部制・単位制の学校についても独立の学校を 1 校ということでございまして、ここにお示しをしております。

以上が資料の 7 というもののご説明でございます。

ご質問等につきましては、後でまとめてよろしゅうございましょうか。

(飯島委員長)

はい、結構です。

(植松主任教育支援主事)

それでは続きまして、資料8をご覧くださいと思います。

県立高等学校の配置図ということでございまして、現在全域につきまして県立高等学校がどのような市町村に所在しているかというものを表したものでございます。特にこの第2通学区。第5区と第6区、東信地域をご覧くださいますと、それぞれの学校がどこの市町村にあるかということをお示しをいたしております。図ですので、実際の地図上の場所とは若干ずれがあるかと存じますが、それぞれの市町村の中には入っていると存じます。現在、第5区には6校の学校がございまして、それから第6区、こちらのほうには11校の学校がございまして、1つ1つの学校名は省かせていただきますが、大体、第5区・6区の右の辺りのところにある学校が該当する学校かと存じます。

続きまして資料の9という、とじましたもので、横で見ていただく表がございまして、ちょっとご覧いただければと思います。平成16年度高等学校別入学者の状況という表でございます。表の見方についてご説明させていただきたいと存じます。ここでは、各通学区になっておりますので、1枚めくっていただきますと、第2通学区でございまして、第2通学区のところでご説明をさせていただければと思います。表は、左のほうから、通学区、旧通学区、現在、第5区と第6区ですが、それから高校名となっております。例えば、上田千曲高校、一番上でございまして、上田千曲高校のところでご説明をさせていただきたいと思います。

所在市町村は、上田市ということでございまして、それから募集定員は320人。40人ですので8学級募集であったということでございまして、その横、入学者数が323人。それから市町村出身者ということですが、これは上田市内の中学の出身者の数を合わせたということでございまして189人ということでございまして、それから市・郡出身者。これは上田市ということですので、今の市町村の出身者と同じ189人となっております。それから旧通学区出身者、いわゆる第5区の中学の卒業生の皆さんたちですが273人ということでございまして、それからその右ちょっと大きい感じになっておりますが、地元市町村生徒数ということでございまして1,273人という数字がございまして、これは上田市全体の中学校の卒業生の合計を表してございまして、それから右へいきまして、定員充足率というのがございまして、これは募集定員に対しまして入学者数の比でございまして、3人多く入っておりますので100.9%となっております。それから右へいきまして市町村出身比率58.5%ということでございまして、入学者の中で上田市の出身者の統計を表してございまして、その右も同じ上田市でございまして、同じ数字が並んでおります。それから旧通学区出身比率ということで、これは、第5区の出身者が84.5%という数字になってございまして、それからその右、地元生徒比率ということでございまして、14.8%という数字がございまして、この部分につきましては、上田市内の中学卒業生全体の中で、上田千曲高校へ進学をしました生徒の比率が14.8%ということでございまして、欄でいきますと、cとfの比ということを表しております。

それから少し下をご覧くださいまして、丸子実業高校の欄をご覧くださいと思います



す。丸子実業のところは、所在は丸子町ということでございまして、募集定員 320 人、入学者数は 315 人ということでございます。それから市町村出身者という欄でございしますが 79 人。これは丸子町の出身の中学生の入学者の数を表してございます。その右の市・郡出身者 149 人という数字でございしますが、今度はこちらは丸子町にあります小県郡全体からの入学者の数を表してございます。それから旧通学区の出身者が 258 人というのは、第 5 区の出身者ということでございます。それから地元市町村生徒数 293 人。これは丸子町、いわゆる中学校 2 つございしますが、こちらの中学校の卒業生が 293 人入学したということを表してございます。それから右のほうへいきまして、定員の充足率は 98.4% ということでございまして、これは先ほどと同じ 315 人ということです。それから市町村出身比率 25.1% ということでございまして、これは、丸子町の出身の c と b の比を表してございます。それからその右、市・郡出身比率 47.3% というのは、小県郡の出身の生徒の比率を表してございます。それから旧通学区、第 5 区からの出身比率は、81.9%。それから地元生徒比率ということでございまして、これは丸子町の出身の生徒の中で進学をした生徒の比を表してございます。ですので、市と町村のいわゆる合併とで、少し表の見方が違っておりますが、以下、表の見方は同じでございしますので、こんなふうにご覧をいただければというふうに思います。

いろいろご質問がございましたら、後でということをお願いしたいと思います。

それでは、次の資料の説明に移りたいと思います。資料 10 をご覧いただきたいと思います。今度は、もう少し数字が細かくなった表でございしますが、ご覧をいただきたいと思います。

平成 16 年度から 17 年度の入学者選抜にかかわる募集定員、志願者数、入学者数の表でございします。これも各通学区になっておりまして、1 枚めくっていただきますと、第 2 通学区が見られますので、そこでご説明をさせていただきたいと思います。やはり一番上が分かりやすいかと思いますので、一番上の上田千曲高校、工業科の中の機械科のところでご説明をさせていただきたいと思います。

左半分が平成 16 年度、右半分、平成 17 年度でございまして、平成 16 年度でいきますと、募集定員 40 人、1 学級 40 人でございます。それから平成 16 年度から前期選抜が始まりまして、前期選抜の定員が 20 人。志願者が 55 人。倍率が 2.75 倍ということでございます。それから入学を確約した生徒の数が 20 人。それからその右へいきまして今度は後期選抜。いわゆる学力検査で入学がございしますが、定員が残りの 20 人。志願者が 22 人。倍率は 1.10 倍。合格者は 22 人でございます。入学者数は前期・後期で 42 人ということでございます。充足率は 105.0% ということでございます。

その右が平成 17 年度になってございます。以下この表はすべて下まで、同じようにご覧をいただければと思いますが、学校によりましては、前期選抜と後期選抜のほかに再募集を実施いたしまして、再募集での入学者があるという場合がございますので、入学者数のところは、再募集で入った生徒も含めた数になっております。前期と後期だけを足すと、ちょっと入学者になっていないところがあるかと思いますが、そのところは再募集の生徒を入れた数字ということでございます。数字が小さくて分かりづらいと思いますが、各学校の学科ごとについて集計をしてございます。また、この表の中でも何かご質問があれば、また後でお出しいただければと思います。

それでは、もう一枚、資料の 11 というものがございまして、1 枚物でございまして、平成 17 年度旧通学区別入学者流出入表（全日制）対 16 年度比較というものでございまして。こちらの表の見方につきましてご説明をさせていただきたいと思っております。

表が 3 つに分かれておりますが、一番上のところをご覧いただきたいと思っております。平成 17 年度流出入表というところでございまして、旧通学区ごとに集計をさせていただきまして、旧通学区の中学の卒業生が、どの通学区の高校へ進んだかというものを表したものでございまして、例えば旧 6 区の、佐久地方の旧 6 区をご覧いただきますと、構図のところに、旧通学区の 6 区というところを右のほうに見ていただきますと、上から数字が、1、2、5、2、155、1,727、1、0 と並んでおります。これは旧 6 区の中学を卒業した生徒が、どこの学区へ何人進んだかというものを表しております、1 区へ 1 人。それから 2 区へ 2 人。3 区へ 5 人。4 区へ 2 人。5 区、上小のほうですので 155 人。それから地元の 6 区で 1,727 人。7 区は 1 人というように、それぞれの通学区の高校へどれだけ進んだかというものを表しております。

ちょっと前後しましたが、左側の欄。5 区のところ。上小地域でも上のほうから 2、4、15、78 と並んでおりますが、それぞれの通学区へ進んだ生徒の数を表しております。それから今度は、横に見ていただきますと、例えば 5 区、今度は左の通りの 5 という数字の欄をご覧いただきますと、これを今度は右のほうに見ていただきますと、3、5、13、124、1,540、155 と並んでおりますが、これは 5 区へ入ってきた数を表していると思えば分かるかと思いますが、5 区の学校へ、1 区ですから飯山のほうですけれども 3 人来たということでございまして。それから 2 区から 5 人。それから 3 区から 13 人。4 区から 124 人。5 区から 1,540 人。これは地元です。それから 6 区から 155 人ということでございまして、これは流入ということができると思っております。ずっとこれを右へ見ていっていただきまして、315 人というのが一番右に合計欄が出ておりますが、これはつまり、全部の流入数ということで、他の通学区からの流入の数ということでございまして。それからその下の第 6 区のところの流入の数をご覧いただきますと 209 人となっております。

先ほどご説明を落としてしまいましたが、流出のほうの合計は、5 区、6 区今度は縦にご覧いただいたときの下の方の欄。流出数の欄をご覧いただきますと 5 区のほうが 271 人。6 区が 170 人となっております。これは、学区から外の学区へ出ていった生徒ということでございまして。そうしますと、その下に流出と流入と並んでおりまして、第 5 区でいきますと流入引く流出が 44 人ということで、流入のほうが多いと。そうすると 44 人ということでございまして。それから第 6 区のところは 39 人。やはりこちらのほうも流入のほうが多いという状況を表しております。

これが今、ご説明させていただきました部分が平成 17 年でございまして、それと全く同じ形で集計した平成 16 年度の流出入表が、真ん中の欄にございまして。若干その傾向が違う面もあるかと思いますが、平成 16 年でいきますと第 5 区のほうは流出の総合計が 253 人。流入が 355 人で、流入引く流出が 102 人となっております。それからその右、第 6 区のほうは、流出が 216 人、流入が 183 人で流入引く流出が、マイナス 33 人ということで、この年、平成 16 年では、6 区では流出のほうが多かったということを表しております。

平成 17 年と 16 年の比較ということで一番下の欄でございまして、平成 17 年度引く平成 16 年度ということでございまして、それがそれぞれの差を取ってここに示してござい

す。まず 5 区のほうは、マイナス 2、4、7、マイナス 9、56、18 と並んでおりまして、6 区のほうは、上のほうから 1、2、1、マイナス 2、マイナス 52、マイナス 189 というような数字になってございまして、若干、その区によって傾向が異なっている点もあらうかと思っております。

以上が、平成 17 年度と平成 16 年度の流入と流出を表にしたものでございまして、ちょっと説明が不十分で分かりにくかったところがあるかと思しますので、またご質問いただければというふうに思います。

それから最後にもう 1 つ、ちょっと厚い冊子でございしますが、そちらのほう東信の学校の学校要覧をご用意させていただきましたので、ファイルをご覧いただきたいと思います。一応、県立高校、学校番号が付いておりますので、学校番号順に並べてございます。上小地域、第 5 区のほうから並んでおりまして。大体、先ほどの表も全部そうですが、一応、学校番号が付いておりますが、この順でございまして。上田千曲高校からでございます。上田千曲高校をご覧いただくと分かりますがコピーでございまして、平成 17 年度の本年度の学校要覧が、本日に間に合わなかったということでございまして、コピーで平成 16 年度のものをご用意させていただきました。ほかに中のほうをご覧いただきますと、平成 17 年度、今年度のものができている学校もございしますが、中には 16 年度のものが入っているところもございまして、残部のあった学校につきましては、昨年のもを入れた学校もございまして。それから残のない学校、上田千曲のような学校はコピーでもって対応させていただいております。ちょっと統一が取れていなくて申し訳ございませんですが、概要をご覧いただくということで参考にさせていただければと思っております。

以上で説明を終わりにしたいと思っております。よろしく願いいたします。

## 6 議事

(飯島委員長)

ありがとうございます。それでは質疑応答に入りたいと思います。

先ほど全体説明会で説明内容については、この委員会で質問してくださいということがございました。ただ今、この委員会で説明した資料、合わせて全体会でのご質問をお受けしたいと思っております。どうぞ、市川委員。

(市川委員)

お願いします。まず資料 7 のことに関しましての質問と確認ですが、これまでの高校改革推進の關係の基本的な考えの中での、お考えごとの確認をさせていただければとも思うわけですが、例えば旧 5 区・6 区の学区に関しましてですね、現状の校数は、資料 7 では 17 と。基準では 15 になると。これはマイナス 2 というふうに取れるわけですが、それを新たに多部制・単位制が 1 ということの意味は、これはマイナス 2 が、その内の 1 つが多部制・単位制になるという意味ではなくて、新たにその高校教育の柔軟化と多様化のために、例えばこれでいきますと連携型県立高校、総合選択制高校、ジョイント高校、中高一貫校の教育校と、それから e-Learning の高校とか、たくさんの多様な關係を挙げていらっしゃる中で、単位・多部制を新たに、既存の 15 の中にプラスしてというお考えかなというふうに思ったわけですが。その 1 点についてのお考えをご説明していただきたいこ

とが第1点ですね。

それから定時制高校のことに触れられているわけですが、この中に定時制高校の改編と  
いいますか、減といいますか、それを吸収。そういうようなお考えもあるのかどうかとい  
うところもお伺いしたいのですが。

それから、その単位制・多部制だけしか挙げられていなくて、今後はこの委員会では、  
総合学科高校も含めて、議論はこの委員会ではなされていくのかなというふうに思います。

(飯島委員長)

はい。それでは、質問に、お答えをいただいでいきたいと思います。事務局のほうで、  
ご説明をお願いします。

(柳澤教育主幹)

はい。ただいまのご質問でございますが、学校数の資料7にかかわってのご質問ござ  
いますけれども、現在第5区で6校。第6区で11校。計17校の学校がございます。総数  
決定基準に基づきまして、そこにお示しいたしました15校というのは、これは全日の数と  
いうことで、ご理解をいただきたいと思います。全日の学校が17校が、15校というこ  
とでございます。

多部制・単位制であります。これは、独立校、ということになります。ただ全く新し  
い更地に新しい学校をつくるということではなくて、既設の学校を、多部制・単位制に変  
換をしていくということになりますので、学校として独立したということで数えますと、  
16校ということになるかと思います。

それから定時制のことですが、今、申し上げましたように、ここに挙がっている数は全  
日制のカウントでございますので、定時制の数は入れておりません。先ほどの全体会の中  
でございました検討依頼事項のところ、この多部制・単位制の設置等の中に、定時制の  
適正配置についても考慮するというふうにございましたので、今後、この点についてもご  
検討いただくことになろうかというふうに思っております。

それから3点目の総合学科のことでございますが、総合学科も、各通学区に1校設置と  
いうことになっておりますので、その総合学科につきましても、新しく学校を建てるとい  
うことではなくて、既設の公立の学校を総合学科に変換をしていくという考え方でござ  
いますので、その15校の中に総合学科は含めて考えていただければと、こんなふうに考えて  
いる次第です。

(飯島委員長)

市川委員、よろしいでしょうか。

(市川委員)

そうしますと、15(1)というのは、15の中に多部制・単位制高校が含まれるというこ  
とですか。そうしますと、既存の2校減になりまして、それが1つ変換するのではなくて、  
2校は減るが、その15のある中のどれか1つが単位制・多部制になるという、そういうこ  
とですか。

(柳澤教育主幹)

申し訳ございません。15 とは別に、多部制・単位制 1 校ということになりますから、先ほど言いました多部制・単位制を 1 校として設置ということになっておりますので、学校の数でいきますと 16 校ということになり、全日制が 15 校ということになります。

(飯島委員長)

市川委員よろしいですか。

(市川委員)

はい。

(原 委員)

全体会で質問の時間がなかったことがあるので。できればそういう時間を取って、運営をしてやってほしいことを冒頭に申し上げたいと思います。

第 1 は、全体会で出されている資料にかかわって。いろいろあるのですが、取りあえず 2 点、3 点に限定させていただきますと、この高等学校改革プラン推進委員会設置要綱。設置要綱にかかわる問題で、これは、名称それから所掌事項から見ますと、改革プラン検討委員会の最終報告に基づいて、改革プランの示している内容、これを推進するということに、どうしても読み取れるわけですね。しかしこれについては、例えば、この分厚い報告書の 3 のほうにですね、いろいろな資料がありますけれども、例えば一例を申し上げますが、これは中間報告に対する意見ではありますが、実にたくさんの要望が出されていて、ここに盛り込まれている内容について、かなり批判的な、あるいは根本的な疑義を書いている、表現してあるというふうに思うのです。そうすると、この改革プランの最終報告に基づいて推進するということは、いかがかと。これが第 1 の私の疑問であります。

それは、第 2 条所掌事項の 1 号、2 号、3 号、4 号、それぞれにもかかわってくるのですが、取りあえず、今、非常に注目を浴びている第 2 号の「総数の決定基準」という部分がございます。私は、この報告書を丁寧に読んだつもりなのですが、私の読みが甘くて、あるいは浅くて取り違えているようでしたら、ご指摘をいただきたいのですけれども。1 案から 4 案まで示されています。そして検討委員会は、この報告書の 18 ページから 19 ページにかけてですが、県民アンケートにおいては、3 から 4 学級という意見は地方で、5 から 6 学級という意見は都市部で特に多かった。という記載があります。まず、ここについて質したいと思います。3 から 4 が地方で多く、5 から 6 が都市部で特に多い。県民アンケートの資料も拝見しましたが、都市部で特に多いというふうには、わずか 5 ポイントの差ではないでしょうか。これは、「特に多い」という記載をする、その「特に」の理由になるのでしょうか。これは非常に基本的なデータの扱い方の問題でありますので、この点についてお答えをいただきたいと思います。

そして、その県民アンケートの結果は、3 から 4 学級が、確か 39%、5 から 6 が 38% という数字であったという記憶をしておりますけれども、その中から、ここが分からないのですね、今、19 ページを申し上げていますが、特に多かった、その次の 3 行目以降にございます。一定規模の小規模校が存立することになることが予想されるが、それら小

規模校は地方に多くなるであろうから、その分3から4学級という希望は満たされることになる。したがって目安として、5から6学級規模にすることは、平均値として県民の声を反映することになるであろう。

読みが浅いのでしょうか。ここが分からないのです。したがってそうなりますと、その数が下にありますが、第3案が最も適切であり、そして5から6学級、中間値の5.5というふうに論旨が進んでいきますが、その論旨が、私には、どうしてもみ込めないものですから、これについてお願いをしたいと思います。

もう1点だけに限らせてもらいますが、全体会の資料5で、スケジュール問題が記されております。この5月末に、本日、委員会が開かれていますね。これから、高校課長の説明では、12月に概ね、場合によっては1月ということの説明されておりますから、半年、今日の日程で、この無理難題を、というよりも重要な課題をまとめるということについては、私は、これまた大変に難しい、困難なことであろうというふうに思っています。したがって、この審議期間の問題についても説明を求めたいと。

取りあえず以上であります。

(飯島委員長)

はい、ありがとうございます。

事務局側へ3点質問が出ておりますけれども、それぞれよろしくお願いいたします。

(柳澤教育主幹)

アンケート調査の結果についてのことだと思いますが、3から4、5から6の集計の結果を見ますと、町と、それから村、それから市というような呼び方での集計の仕方になっているわけですが、市の中で5から6が特に多かったと。

その5から6程度ということで目安といたしますと、3から4というふうな数、これは現在でも、いわゆる地域高校といわれる学校におきましては、3とか4とかという学級募集というふうなことで、実施しているわけですが、全体の目標を想定して、5から6というふうな目安にしますと、それを平均にして、総数を割り出していけばですね、当然3とか、4とか、そういう学校もあるし、あるいは、7学級とか、あるいは場合によっては8学級というような学校もあるかもしれないと。というようなことからしますと、目安として、5から6程度にしますと、3から4という学級が、当然存在するわけです。都市部に3、4ではなくて、地方に3、4が大きく存立するであろうと。こういうような意味かと思っております。

前のページ18ページのところにグラフがございますが、これは折れ線グラフが、1学年の平均の学級数を示しております。そして、縦の棒グラフが、中学の卒業者数を表しておりますが、ご覧いただきますとお分かりのように、ピーク時が1学年の平均が、7.21と平成の元年、2年の辺りですが、そこからずっと下がっておりまして、現在平均が、17年のところで見ていただきますと4.98と、こういうふうな1学年の平均学級数になっております。

そうしますと、5から6の範囲で考えますと、当然、小さい規模の学校も存立しているわけがありますので、そういう小規模な学校は、地方部に多くなるであろうと、そういう

説明かと、そんなふうに思ってます。5 から 6 に持ってきますと、3、4 も当然、存在するわけでありますから、すべての 89 校を 5 と 6 の間に持ってくると、こういうことではなくて、平均値として 5、6 というふうにしますと、3 も 4 も。下限設定が、2 学級になっているわけでありますので、いろいろな規模の多様化を生かした学校というそういう意味合いになると思っております。

それから委員会の名称の件でございますが、先ほどもございましたけれども、設置要綱の第 1 条にございますように、高校改革を推進するための審議機関としてということで、この最終報告を受けまして、全くゼロから臨むということではなくて、最終報告を踏まえた上での高校改革と、そこからご議論をいただくということで審議機関ということになっているわけでありまして、そういうことで高校改革を進めるためのプランを策定する上での具体的な検討をお願いするということで、推進委員会という名称になっているというふうにご理解をいただきたいと思います。

それから、もう 1 点スケジュールの件でございますが、先ほど全体会の中でも説明がございましたとおりで、平成 15 年から、この改革プランに向けてのスタートが切られているわけございまして、16 年度、1 年 3 カ月ほど、この検討委員会が行われて最終報告を受けたと。そして今年度、それに基づいて審議をするということですので、決して拙速な議論とそんなふうに思っておりませんで、しかも、またこの推進委員会も月 2 回程度は、できれば開催ができればということでございますので、その中で十分なご意見をいただければと、そんなふうに思っています。

（原 委員）

いろいろ申したいことがあるのですが、1 点だけにしましょう。

先ほど私が問題にしたのは、5 から 6 学級が都市部で特に多かったということを問題にしましたけれども、今、その県民アンケートの数字を持っているのですけれどね。市が 40.8%、5、6 学級ね。町が 34.3%、村が 31.6%、こういうふうに数字になっていますよね。これは、とりたてて高いというほどかということをお願いしたわけですね。それについて、そのほかのお答えについても不満なことがあります、また後ほど意見を述べさせてもらいます。

（飯島委員長）

ほかの委員の皆さんは、県民アンケートのデータが持っておりませんので、ちょっと分りかねますが、今の質問についてお願いします。

（柳澤教育主幹）

県民アンケートの学級数のアンケート結果だけでは、5 から 6 が、市のほうが 40.8%。3 から 4 というのが 35.5%。それから町のほうが、5 から 6 が 34.3%。3 から 4 が 42.5%。それから村のほうが、5 から 6 が 32.5%。3 から 4 が 52.4%と、こんな数字になっております。

(飯島委員長)

はい。数字のところの控であります。それでは佐藤副委員長。

(佐藤副委員長)

私もこの推進会議の委員になって、えらい委員になってしまったなと、実は、大変心が重いわけですが。私は、この推進会議は、かなり上手に進めていかないと、議論がなかなか収まるところに収まらないし、不完全燃焼のまま終わる可能性もあるのではないと思っているのですが。

この問題は検討委員会でもう既に1年以上やられているのですか。経ているわけですね。最終答申も出ているわけですね。それで恐らく大枠は示されていますね。これを基に推進会議というのは細部にわたってつめていく委員会だろうなというふうに承知して出ているわけです。

そういう中で、教育というのは、もう話したら切りがない。あらゆるところで、いろいろ1つの問題についても、錯綜しておりますので、なかなか切りがない部分でもあるわけです。少なくとも今日、最初に示していただいた、この3月にも、最終的には一応、案を出してくれと、こういう話の中で、やはり私のスタンスとしては、もうこの最終答申に沿ったもので議論していかないと、なかなか難しいのではないかな。枠は取っ払ってやりましょうという話になりますと、話は発散してしまうのではないのかなということを感じております。私なりに意見がございますけれども、そういう立場で行きたいと、このように考えております。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

この委員会の在り方は、原委員がおっしゃるように、先ほどの報告のあったプラン検討委員会の最終報告書を受けて、「改革プラン推進委員会」がある。この確認をしておかないと、また、検討委員会と同じような意見を繰り返し言うことは、出てくると思うのです。その辺のところを意思統一をさせていただきますので、ご意見をいただきたいと思います。

(遠山委員)

私は、検討委員会での検討経過や、この計画が非常に費用対効果というかね、要するに、早く言えば学校の統廃合は、とんでもないですよ。

こんなことを言って、私は、いろんな話を聞いていて、これは県が統廃合して弱ったものだ。そういうことに貫かれているのです。ただいろんなことを言っているのではない、その上、統廃合をした場合に、経費がどのくらいもうかるのかと、そういう計算を1回も出したことがないね。先生がいなくなればこれだけ経費が浮くけれども、ここにこれだけの金があるはずですよ。これを減らすごとに、いくら県は節約できる。こういうものを全然、出していないんですね。そのものは反発が多いから出さない。

ただ生徒が減るから、高校減らせと。方法、内容は多少考えているかもしれないが、ほとんど考えていない。教育というのは、やはり教育の効果というのは内容だと思いますね。それを間違えてしまって、それでいろんな先生を頼んで検討することは、とんでもない話



だと思えますね。

長野県の教育は長野県でやれと、ずっと言ってきました。それはですね、とんでもない人たちに頼んできてから、おれら長野県以外の人に来てやってね、で、「皆さん、これはこの枠でやりましょう」何て、とんでもない、冗談じゃないと、こういうふうを考えていますから。

私は、さっき聞いていて思いましたが、これは、ことし中にやるとか、再来年までに決着を付ける。この期限は、どうしてこのように決めたのですか。教育委員長さんの宮沢さんの任期は何年です。この12月ですか。私は、委員長さんの発言に非常に疑問を感じている。学校名を出せとか。何も知らな過ぎる。実情を知らな過ぎる。もっとね、宮沢教育委員長は、長野県中の高校を歩いて、どういうふうになっているのか、どういう生徒がいるのか、見てきてから言いなさいと言うんだよね。

それがですね、何か吉江課長に、長野県の今度整理する学校の名前出せて、そんな教育じゃないじゃないですか。心を動かしてね、本質的にやるなと思ったら知らないですよ。それをね、履き違えている。お願いいできるものならね、長野県の高校は、こうですなんて、そういう発想をして、おれの任期の間にやってみせると。最初は絶対に許さないね、それは。

今回、1番影響を受けるのは、地域高校ですよ。ね。極端な話を言うと、やるのならば都市部校の統廃してもらいたいね。新しく4学級から6学級とつくっていきながらね、新しくつくる場合、4学級から5学級。今までの6学級以上の大きい学校は、どうするですか。大きい学校、それでは9学級ある学級は、3学級は下げるのですか。それをまず、やってもらいたい。

地域高校は自分たちでつくった学校ですよ、元は、3億円の県税を使って建った学校。一番いいところに建っている長野の真ん中へやって建った、そして、いいところへ座っている高校がね、地域高校の多くのほうのね、やっとみんなで応援して、動かしている高校の意味が分かりません。

極端なことをいえば、私は全部、全員、値段でね、今の時価でいいから、長野の中にある幾つかの高校は、返してもらいたい。長野県へ金を返して、また自分で建て、そして自分でやれば地域高校の気持ちが分かるですよ。

校長先生たちもそうだ。偉くなってしまえば、のど元を過ぎれば熱さ忘れるでね、苦労したことを忘れてしまっただけ。県の言うことを、はい、はいと聞いてやってね。それではいけないと。自分たちがそういう苦労をしてきたら苦労してきた分、それでこれだけ実績を上げてみたときに、それがなくては私は、教育の本当の意味はないと、こういうふうに考えております。

ちょっと今、感じたことだけで、今、はじめの時に言ってはいけないと言われたからね。なぜ、1年でやらなければいけないかという理由を説明してください。

(飯島委員長)

この委員会の存続の意味のところへ入っております。大事なことだと思うのです。それをお互いに納得して推進するつもりでお集まりにならないと、この先、意見がかみ合わない委員会となってしまいますから、今ここで意見の意思統一をすること又、まとめ

ることだけがいいことではありませんので、ご意見をいただいて進めたいと思います。  
まずは、私が答える内容ではございませんから、事務局のほうでお願いします。

（柳澤教育主幹）

今、ご意見を承ったということで...

（遠山委員）

承ったというのではなく、何でね1年でやらなくてはいけないわけ。

それ、1年も前からかなり先生の数が少なくて、もうかるとかね、そういうことをしているですよ。だから、こういうあれやったから、改革プランができたから、1年で解決しなくてはならないという理由はどこにあるかという、ここを聞きたい。

（柳澤教育主幹）

先ほどもちょっとお話をいたしました、最終報告書の18ページのグラフにございましたけれども、今現在の状況で、長野県の高等学校の平均学級数5を割り込んでおります。その先さらにこれまた、少子化の中で平均学級数が落ちていくことが予想をされています。全体会の中で説明がございましたけれども、平成31年では、今のままいきますと、4を割り込むような4.1ぐらいのところまで落ちていくわけでございます。

そうしますと大半の学校が、2学級とか3学級とか、場合によって1学級とか。非常に全体規模が縮小していってしまうということが1つ懸念材料ということで、再編を行う際の目安が出てきているわけでございますが、さらに言いますと、平成30年、31年の辺りで、先ほど全体会の中で課長のほうからも説明がございましたが、今のままの見直しを、もういっぺんその辺りで見直しをしないといけない時期が来るのだらうという話がございました。そうしますと、仮に今年度末、今、事務局とすれば今年度末ということで日程を立てて、計画をしているわけです。そうしましても、18年から即総合学科等の実施というわけにはいきません。早くて19年スタートということになりますと、仮にある学校が統合したとか、こういうかたちになりましても、21年で完成と。こういうことになりますので、それがさらに先送りになっていきますと、実際問題は時間がかかっているということもございまして、先ほど言いましたように、どんどん学校の規模が小規模化していくという中で、できるだけ質の高い高校教育ができるようにということで、現在、年度末を目途に実施計画を作成をしまいたい。こんなふうな思いで、できれば、先ほどのスケジュールのところでは、12月とございましたけれども、12月ないし、1月ぐらいのところ、推進会での検討結果についてご報告いただければと、こんな思いでいるわけでございます。

（和泉委員）

今の話ですとね、僕は民間企業ですけども、生徒さんが31年に、ここに1万5,000ですか、数字があるけれども、大体、相対的に急激なカーブで下がっていくというのと、例えば、大体同じ学校数の生徒数のところに行くと、そのときにその学校運営を支えた先生、それからスタッフ、これがアウトプットのある面では、インプットのもちろんサービスだとか、評価だとか、いろいろかかったのだけれども、概算の数字は、つかまえられなくて

も、それを支える数字が、基本的には、全くイーブンで価値観を判断するかは別にして、僕は1つの目安だと思いますよ。それだけのエネルギーというか、スタッフは、いるということが、余剰と見るかどうかは別問題。一つの視点としては僕は、数字として握ってれば、判断の基準になると。だから31年に、この人数のときに、この20、これ何年ぐらいですかね。9年かな。このときに、大体そういうふうにかかわった先生、スタッフはどれぐらいでやっていたのか。中身は悪いかもしれない。だけど、1つの目安として。

（芹澤委員）

基本的に、やはり生徒数が3万から1万5,000に減ったというのは、半減でしょう。ものすごい数ですよ。これを見る限りにおいて、高校の数をいじらないということ自身がおかしいので、その数をどうするかという目安として、一応、平均的にいうと5.5学級で割り込んで、76という数字が出てきた。

だから76がいいかどうかまた議論をするとして、議論があるかと思うのですが、一応、やはり減らすという中での比重をどうするかというのを、目安としての5.5でいう76というのは、それなりの説得力がある。

それにさらにですね、今、向こうの方が言われたように79校のころとの生徒数の比較をすれば、きっとかなりの数字で、いい比較が出てくるのではないかと思います。ですから、どこを、10校減らすかどうか、今後の問題としてもですね、いずれにせよ、これだけ半分になってしまったという事実を重く受け止めて、減らすというのはいり得るし、76というのも一応、本当は、もう極端な、もっと減らしてもいいのではないかという議論もないわけではないけれども、そうは言っても、そんなむちゃくちゃなことを教育でできるはずがない。とすれば、目安として76というのも、1つの基準としてはあり得る。

この期間は一応、我々はですね、原点に返ると、この検討委員会そのもののこれを苦言するというか、より実行をあらしめるための委員会だから、一応、この検討委員会で提起されたものを基本に考えていかざるを得ない。

このように考える中で、やはり期間を1月がいいか、それが年度内でいいか、それが分かるとしても、ある程度の期間を区切ってやらないわけにいかない。そういうことではないかというふうに、私は考えます。

（荻原委員）

今日、初めての会合ですので、温度差もあり、それぞれの多事論もありますので、もう30分ですから、今日、来た方のご意見というか、感想というか、まだ発言されていない部分の方を、ちょっと1人ずつ、私は、こういう意見ですというものをお聞きして。意趣が変わりまして申し訳ありませんけれども、それぞれの考え方を知る意味でも、感想なり、私もそんな勉強をしていないですけれども、そういう感想を、各委員さんに聞いていただいたらいかがでしょう。

（飯島委員長）

運営のことについてご質問をいただきました。まだ発言をしていない委員の方で何かご意見ありましたらどうぞお出してください。

(太田委員)

資料6でございますけれど、この資料を見て、本当にがくぜんとしたわけですが、なんで今までこれを放置しておいたのかというような感想を持たざるを得ません。なぜもっと早く手を打っていただけなかったのかと、それが1点でございます。

また教育というのは、費用と効果だけで判断できるものでもないということは、よく理解しております。そういうことを考えまして、この委員会の設置要綱、「魅力ある高等学校づくり」それから、報告書にある県立高校の再編整備に関する事項。総合学科高校および多部制・単位制高校の設置等の趣旨は、賛成であり、どうしてもやりたいと思っています。

以上でございます。

(荻原委員)

私は、皆さんのいろんな議論は、その通りだと思います。それぞれの考え方でございますから。ただ、一番の県からの委託の部分では、多様化する生徒の希望に応じるということが、一番、私どもが考えていかなければ。子どもたちのためにやるわけですから、我々の利害というか、そういう部分はまた別にして。例えば、とにかく定時制の数字が入っていないとかと言いましたけれども、それも示していただきたい。

それから、各、多様化するニーズに、それぞれ音楽科とか、理数科とか、いろんな科がありますよね、各高校にも。ないのもありますけれども、そうした選択制といいますか、そうした専門的な部分は、これからも続けるのかどうか。

それから、その5、6という通学区の都市化ですか、1つにしたり。それから自己推薦とか前期・後期という格好でやっていますけれども、進学志望の多い、あるいは、専門学校とか就職する方もおられる。そんな生徒たちを、どうやって使う人たちと言っては悪いですが、親も含めて、そういった生徒のための学校改革になればねと。私は、今のところそういう意見でございますので、よろしくお願いします。

(飯島委員長)

はい、ありがとうございます。ほかにまだ発言していない委員のかたで、ご意見ある方どうぞ挙手をしてご発言ください。よろしいでしょうか。

どうぞ。西村委員。

(西村委員)

今、委員長のほうから、この会議の在り方についてお話がございましたけれども、私自身は、この高校改革プラン推進委員会の委員になってほしいということで、これを承ったときには、教育委員会として高校改革プランの最終報告書を出されましたが、それに基づいて、我々が、この委員会で考えていくことだと、私は、そうっております。従って、先ほど委員長がおっしゃった分については、多分皆さんがそういった認識の元に、この会議に出られていますから、そうでなければ多分、この委員を受けてないと思う。だから認識は、委員会の答申に基づいて、我々推進会議をやるという形で、ここは統一されていると私は思っています。

それからもう1つは、現場にいる者として、学級数など、いろんな議論が出ていますけ

れども、それも大事なこともかもしれません。しかし、もっと大事なことは、子どもというのは、我々大人の鏡なんです。我々が、この状況を悪くしているのです。だから、どうやったら魅力ある学校をどうしたらつくれるのか。子どもの立場に立って、どう考える、ここが、一番のポイントですから。先ほど荻原委員もおっしゃっているように、子どもたちのためにどうするか。まずそこが一番です。私はそう思います。

(小林委員)

私は、これ最終報告、郵送されて読ませていただきました。今日のお話のときに、1 ページ目ですか「はじめに」のところに、書いてあるということで、前の会場でご説明がありました。第1に多様化する生徒の希望に答えることができる魅力ある高等学校づくりと。第2は、生徒数の減少や、4 学区制の実施等に対応した高等学校の適正な規模及び配置について、この報告書は書かれていると。この上に立っているいろいろ含んだ内容もあるということで、逐一ご説明がありました。

私、大変だなと思いながら、ひとつ、こういう考えも含めないのかな、なんて気もしました。それは私立の学校はこれから増えるのか。定員そのほかにも考えているのかということが、問題になってこないだろうかということ。

それから中高一貫ということもあります。募集定員が、これだけ人数が減れば、県立を減らすとすれば、私立も減らすというようなことを、お願いするのかということになってきます。また、県立は特色ある学校を目指して特に今では、特色あるということで、相当力を入れて、それなりきに高校・地域が絡んでいる、地域校と言われるところは、特に頑張っているというようなことも、チラチラ目にし、耳に入ってきています。

ここで話し合うときに特色あるというのを、いかに位置付けているかということ、特色とは何だろうかと、現にある特色を考えるのかをやるのか、将来的にそういう方向にやるのを視野に入れてこれから検討課題にしていくのかの位置付け。私たちが、どのくらい現に実施している高校とこれから実施しようとしている高校の比重を考えるか、先ほども、生徒のニーズが多様化して、そのニーズに答えるということで、ご説明がありましたけれども、ここにも多様化する生徒の希望に添う、その希望を、どう評価をするか。こういうのを配っていただいたと思うのですけれども、その辺の位置付けを考えていくこと。

それから、減にするというような話が、チラホラ出てきていますけれども、今まで通っていた生徒が、遠くへ行かざるを得ないというようなときに、通学援助みたいなことを考えるのか。ただ、駄目だからと削ってしまうのか。そこまでも考えた上での検討をしていけばいいのかと。先ほどの説明会で言うと、そういうものは全部含まれてしまう感じがします。私たちが検討課題して、まな板へ載せるときには、あらゆることを考えなければならぬと思って、今まで、悩んでいたのもので、発言をやや控えている。そんなことを思いながらこの場に臨んだわけです。

以上です。

(飯島委員長)

ありがとうございます。ほかには。

(中沢委員)

大きな論点で2つで。1つは、多様化する生徒への柔軟性、個性化。そういうものを高校の在り方ということが1つのあり方で。それからもう1つは、生徒数の減少に伴う学校づくりという、大きな論点があると思いますが。

私は、中学校の立場で考えたときに、確かに今、生徒は、非常にいろんな社会の、もちろん背景がありますけれども、価値観のいろんな多様化もありますよね。また、保護者のいろんなそういった価値観の多様化もあります。そういう中で、これからの社会を担っていく、そういった子どもを育成していく中で、やはりそれに応じた教育の在り方というのが根本的に大事だろうということを思いますね。

そういう面で言うと、確か現行の高校の場合に、その多様化に応じられているかということ疑問に思います。そういう点で、例えば、最終報告に出されている11ページから12ページで、いろんなタイプの高校ですね。これは、非常に真剣に考えていく段階であろうと。

今回、具体的に総合学科、あるいは多部制・単位制というものも出されていますね。それはそれでいいのですが、それだけにとどまらずに、ここに出されている11ページ、12ページのこういったものも、やはりこの時期に大いに考えて取り入れられるものは取り入れていくということが、まず第1であろうと思います。

それからもう1つ、数の問題ですけれども、これは確か資料6にあるように、また意見が出ていたり、生徒の激減に伴って、高校の数、これは見直すということも1つあるかと思いますが、他県において同じような現象が起きているところがあるかと思うんですね。そういう所は、どうそれに対して対応しているのか、これも学ばなければいけないひとつだろうと思います。

実際問題として、減っているときに、学校、生徒の立場、あるいは地域から見るときに、さっきも意見が出ていましたが、ある1校がなくなることによって、遠くへ通わなければいけない。こういう現象も出ますよね。そういう場合に、それをやはり考えたときに、高校数は減っても、例えば、学校そのものは分校とか、そういうような形で残して、そのこの学校に通えるような、そういうことも考えられないことはないのではないかと。実際、長野県においても分校のあった時代もありますし、それから他県においても分校がある県もあるわけですよね。そういうところはどこやっているのかということを読んで、そして、いいところは、ここへ取り入れていくと。そういうこともひとつ考えていく必要があるのかなという気がします。

(飯島委員長)

はい、ありがとうございます。

それでは、もうひとかた。滝澤委員、どうですか。まだ発言されていないようで、何かありましたら。

(滝澤委員)

大変なところへ来てしまったなと思って、反省しているところなのですが。

確かに、これから高校がどうあるべきかということで考えていきますと、私も皆さんのご意見も聞きながら考えていたのですけれども。

高校というのは、あくまでも義務教育ではありませんので、県が高校教育そのものを全体的に何かコントロールするなり、企画するなりということを本当にやるのだろうかというところを、ちょっと疑問に思ったのです。

学校長なり、高校自体がそういう方針の主体性を持っているのか、県の高校教育課といったものが全体をコントロールするような、そういう権限を持っているなり、ちょっとその辺がよく分からないですね。全体がありきなのか、それとも高校独自の、例えば校長先生なり、教頭先生の方針が、その高校を魅力的にできるのかとかという、その辺がよく分からなくて。結果的には、第5、第6で、2校減らせば、それでおしまいなのかなという、そんな単純な話ではないなというのは、すみません、今日初めて分かりまして申し訳ありません。

これから真剣に考えさせていただきたいなということが分かりました。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

(市川委員)

よろしいでしょうか。

私は、実はこの3月まで、高校で就職指導をしておりました。高校の出口で子どもたちが、長野県の地域に育っていく姿を見て、自信を持って地場産業を支えたり、サービスに貢献したりと、そういうような自信を持って巣立つような接点を持って、育つような生徒を育てたいなということを常日ごろ考えておりました。

中学に戻りまして、非常に学ぶ意欲を失った子どもたちが高校で見られたわけですが、しかし中学の段階では、非常に生き生きとした学びの姿が見られるわけです。これがどうして、年を取るに従って、どうしてこれだけ意欲がなくなっていくかということを考えまして、高校に入学するということは、ただ単に学習の意欲をかき立てるものではなくて、多様な考え方をもち、多様な人と共に育ちながら、社会の現場へ出て行く。そのための社会との接点としての高校の在り方を非常に考えるわけなのです。

今回このままいきますと、生徒の関係からいきますと、本当に流入の関係の数字を見ますと、このままでいくと本当に1学級10人というような高校が出現するのではないかと。この中で子どもたちは、社会との接点をどうやって持って過ごしていくのかと。これは大変な問題に今後、長野県はなっていくところだと思います。

単に地域高校の存続ということだけで聞いたときに、子どもたちは多様性を設けて社会に巣立って、長野県を支えていけるのかどうかということは非常に疑問です。

ここにおきまして、各高校とも、私のいた高校でも、先生方は必死になって特色を出そうと努力をされていました。そして新聞も取り上げて、マスコミも取り上げて、地域も取り上げていただいて、生徒の募集に地域への訪問ということで取り組んでおりましたけれ

ども、それは一向に成果が何も上がりません。

ここにあるようなこと、例えば東京都内は、エンカレッジスクールというのがありまして、多種多様な生徒の育成を願って、地域的に連携して子どもを育てようというシステムが機能しておりますし、そのほかの県外の高校につきましても、中高一貫・ジョイント校・総合選択制、これ盛んに行われたことでございます。しかしながら長野県下では、表面的な改革にとどまっているだけに終わってきているのではないのでしょうか。

今回の生徒の増減の、極端に平成 30 年になったときを考えて、思い切ったことを、表面的な改革ではなくて、高校のこういったことを試してみるようなことを、もっと行っていかない限り、社会の接点としての高校はできないのではないかと。

今回の改革委員会の答申によっては、ひょっとしたらこの中のこういった高校の在り方が実現できる道筋ができるのではないかと、私は期待しておりますので、ぜひとも高校の中身を考えながら議論をしていただいて、改革を推進していただきたいと思います。

ただ単に増減ということではなくて、多部制・単位制ということではなくて、もっと高校の根本的な改革で議論をしていただいて進めていただきたいと思っています。

(飯島委員長)

ありがとうございます。委員長の司会が悪いものですから、時間が迫ってきてしまいました。1つの締めをしたいと思います。

私は、先ほど西村委員もおっしゃっていただきましたように、本来、私たちは検討委員会の報告の始めのところにありました課長も説明しておりました。私たちは、この2つの大きな検討事項を基に報告された検討委員会の最終報告書。これをベースにして私たちは、推進委員というものを引き受けたと認識を私もしております。内容については、それすべて賛成、反対と、いろいろ意見がありますけれども、検討委員会の報告書を受けての推進ということで、私も委任を受けました。確かに大変な委員を受けてしまった。その上に委員長ができるのかなというところまでできております。

けれどもこれは、報告書の2でだいぶ議論が高まっておりますけれども、私は、1番のほうが大事なのだと思います。多様化する生徒の希望に答えることができる魅力ある高校づくり。これは何なんだろう。いみじくも今、お話がありましたように、高校生になると何でこんなにやる気のない高校生になってしまうと。

私の私見を言わせていただければ、私は保育園をしております。子どもは目が輝いております。こんな魅力ある子どもたちの目が、年を追うごとに濁ってくるのは何でだろう。それを、感じざるを得ません。ですから、いかに魅力ある高校づくりをしていくか、その先の中に2番目の学区制の問題だとか、入試の問題だとか、いろんな問題が出てくるのだと思います。

ですから基本的には、検討委員会の報告を受けながら、長野県の高校教育が、どうあるべきかということを議論して、結果的に2番のほうの減のところへ結び付いてくるかもしれないですし、報告書の数の問題が、「これじゃあ、駄目だよ」という意見になるかも分かりません。基本的に、そういう委員会の設置だということを理解して、第2回目以降の委員会を運営していくべきだろう、そう思っております。そんなことで、いかがでしょうか。



(原 委員)

今、委員長さんを含めまして、2 人の方から最後の、駄目な高校生と連発されていますので、ちょっとそれは、いかがかと。高校生の本当に今の姿、高校は今どうなっているのかというその現状から、いろんな改革をする必要があるのではないのでしょうか。もちろん否定的な現象が多いということは、私も否定しません。それは、なぜなのかということについての問題意識に関しても持っております。駄目だねというところからは、なかなか改革は進まないものですから、そこについてだけ。

(飯島委員長)

はい。言い過ぎた分は、失礼申し上げました。けれども前向きに検討をするということでは、ご理解をいただけるものであらうと思っております。

(遠山委員)

今のそういう、検討委員会で改革プランと言いましたね。これから外れることはできないと、それをおっしゃるわけですか。

(飯島委員長)

いいえ、そうではない。

(遠山委員)

この中で。

(飯島委員長)

はい。これを受けて私たちは、委員会ができたわけですから、それを…。

(遠山委員)

それを受けて、推進委員会ですね。そんなもの、私は考えてもいなかったですけどね。突然に町村会のほうから、「おまえが、行ってこい」ということで、今日、出てきたわけだから。だから推進委員会という言葉自体が、私は非常に抵抗があると、なかなかね。それの中で話し合って進めていくのであれば、私、出てくる必要ないじゃない。

ただし、これが具体的になると、そんな立派なことを言っても、上田で高校が 1 つ減ると、それは大きい問題ですよ。地域高校はそうなんですよ。1 つ減らすということとは大きなこと。これは命懸けになるんですよ、みんな。だから私は、あまり県のひとつの考え方では、いいけれども。これに沿ってなるべくやりたいけれども、だけど実際問題、総論、賛成。各論、反対になってきますよ、間違いなく。この学校、どの学校、この学校はやめろ、この学校はやれということになってくるしね。だから、しっかり考えなくてはいいけないと。地域住民にもその納得させなくちゃいけない権限があるわけです。14 人でこんな決まらないですよ。そんな簡単なことで決まったら大変なことになりますよ。だから、その責任の重みというものを私は感じているんです。そういうことで、よろしく。

(飯島委員長)

第2回目の委員会以降も、この論議の続きが行われながら、そしていい方向へつなぐと。どちらがいい方向なのか分かりませんが、進んでいくのだらうと思います。第1回の委員会は、お開きにしますが、続けていくことが、まず大事だらうと思います。その結果がどういう結果になってくるか、また別問題として、委員会を進めるということでは、いかがなものでしょう。

その確認をいただければ、次回以降の日程を考えていくという話になっていくかと思えます。この委員会を進めること自体も必要ないというご意見が多数であれば、この後の日程をお決めするほうに行かないのですけれども、いかがなものでしょう。

今後もこの意見の続きを進めていくということで、次回の委員会を開くということで。

(全員)

異議なし。

(飯島委員長)

よろしいでしょうか。

はい。ありがとうございます。

それでは、事務局の方でそれぞれの委員の皆さんの都合のいい日、出やすい日を設定してもらおうということです。それから場所も先ほどの全体であれば第2通学区の場所という話ですから、それが上田になるのか、小諸になるのか、佐久になるのか分かりませんがその辺も含めまして、事務局の方に一任してよろしいでしょうか。

(佐藤副委員長)

今日は最初の日ですので、皆さんの意見をお聞きしたりいろいろその辺のところで、これでいいと思うのですが。私は実は今日、恐らくこういう形でだんだん進めてみましょうよというある程度のコンセンサスが得られるかなという感じで出てきたのですが。また来週同じ会議の進め方でやっても話は先に進まないと思う。一般教育論から始まって、地域固有の問題などいろいろな問題が出てくる。そうするとまた同じだと思えます。ですから事務局はきょうの話を聞いて、大体「次回からはこんな感じで進めたい」というような大まかな会議スケジュールをある程度出していけば、そのとおりに進んでいなくても、あるところでは、結論らしきものが出てくると思う。

だから、あるところできちっとけりを付ける。そういう形で進んでいかないと、ただ意見が出るだけです。それぞれ全部違いますから、ヒストリーが違うわけですから、教育論は全部違いますから、やはりそういう形でまとめていけるような事務局のスケジュールをお示しいただくと良いと思う。

( 太田委員 )

ちょっと関連でよろしいでしょうか。

まさにこれは、質と量の改革だと思います。改革というのはやはりスピードが伴わないと改革ではない。ですから短期にまとめていきたいと思っています。

( 飯島委員長 )

はい。それぞれ、ご意見が十分ではありませんけれども、ご出席の委員の皆さまの気持ちがある程度出たと思うのです。それを受けて事務局の方で次の開催場所、日程を佐藤副委員長と相談の上この後、事務局と一緒に日程、場所を決めて、皆さんにご案内しますということで、きょうは締めたいと思いますけれども、いかがでしょう。

( 荻原委員 )

できましたら委員長さんに次の委員会でテーマといいますか、主要なテーマを決めていただいて少しは勉強できると思いますので、1、2をいったりした人はしょうがないとしても、取りあえずテーマを何項目か決めていただきたいと思いますけれども、希望でございますが。

( 飯島委員長 )

そうですね。これからの委員会は、少しこの件について話してみようということは事前に知らないと、意見があっちいたりこっちにいたりして、まとまっていけないと思います。私たちが十分に意見を出して、将来の子どもたちのための学校改革にお手伝いするのだというような結果にならないと何もなりませんから、その辺のところも含めまして事務局と相談して進めたいと思いますけれども、よろしいでしょうか。

( 西村委員 )

あとは今度、教育委員長が宮澤さんにお代わりになって、ちょっと見ていますと、皆さんが先ほどもおっしゃっていましたが、割りと踏み込んだ発言をされていますのでたぶん6月に定例会議ございますよね。だからその辺でもいろいろな動きが私自身は何となくあるんじゃないかなという感じがするので。従って、スケジュールでもそれを踏まえて決めていただいたほうがいいんじゃないかなと思います。

( 飯島委員長 )

教育委員会の次回の定例会は、いつに予定されていますか。

( 柳澤教育主幹 )

6月14日に。

( 飯島委員長 )

6月14日。じゃあ、6月14日にその教育委員会があるということですが、その以降という日にちで私たちは設定した方が。

(西村委員)

私はいいんじゃないかなと思います。

(飯島委員長)

そうですね。はい。皆さん、そのようなことも踏まえまして日程を決めて皆さんにご案内するということで。

(芹澤委員)

もう1つ希望、すみません。

全体会では組織委員会が月1回から2回というお話なのですね。先ほどは月2回というお話なのですが、それはそんなに拘るわけじゃないですが、1つだけ例えば2回やる場合に日曜日開催のみではないような柔軟さが欲しいのですが。そうですね。曜日の問題も加える。

(飯島委員長)

はい。それも踏まえてやろうということです。

(芹澤委員)

ただ、曜日を踏まえて、なんかバラバラだから曜日はある程度1つか、2つぐらいに絞らないと。ある人は火曜日がいいしある人は木曜日になってしまうから、おおむねこれで委員になったら覚悟を決めて…。

日曜都合が悪いという人が居るから、もう1つぐらい選んでそれで妥協してやっていくと。みんな、ほとんどの人が日曜がいいと言えば、日曜でも多数決だから構いませんがね。

(原 委員)

僕はだから、2回と言ったのは1回は日曜日で、あとは違う日がいいのじゃないかなというふうに申し上げた。

(芹澤委員)

1日やるのか半日でやるのか、その辺も基本的なことの見通しをつけていただければ。

(佐藤副委員長)

やりだしたらきりがいいから教育論なんかは。ですから時間を切って午後何時からとやらないときりがいいですよ。皆さん、みんなそれぞれの考え方があるわけだから。日曜午後3時ごろか。

(芹澤委員)

ここで曜日を決めたほうがいいですよ。

せっかくだから言うておくけど、ほとんどの人が日曜でいいなら、日曜にしていだいていいですね。皆さん、多数決を採ったほうがいいよ。

(飯島委員長)

一応、日曜とあと曜日とすればもう1つぐらい。

(芹澤委員)

ほとんどの人が、日曜がいいのなら日曜に決めましょう。

ちょっと多数決を取ってみて、どのぐらい数。

(飯島委員長)

日曜でよろしいという方、どうでしょう。

【挙手】

(飯島委員長)

では、大方が日曜ですね。

(柳澤教育主幹)

結構でございます。

(飯島委員長)

はい。よろしいですか。

また、基本的には日曜だということで、それから外れるときもあると。基本的には日曜ということでよろしいですか。

はい。それじゃあ、このあとは、6月14日以降のところの日曜を中心に開くということで調整して、また事務局のほうからご連絡を申し上げたいと思います。

1時半ということ。非常に細かくご指摘をされておりますけれども、それではそんなことでよろしく。他に事務局のほうで何かございましたら。

(植松主任教育支援主事)

ありがとうございました。じゃあ、今お決めいただいたようなところの日程のほうをまた決めましてご連絡差し上げたいと思います。

それでもう1つ、きょうは学校要覧をご用意いたしましたけれど、もし重いということもございまして、もし次回まで必ず預かるということであれば、ちょっと置いていっていただければ次回までお預かりいたしますけれども。そんなことでございます。

(飯島委員長)

学校要覧につきましては、次回の委員会までお預かりする。

お持ちいただく方はお持ちいただいて結構です。それではこの委員会を閉めたいと思います。どうもご苦労さまでした。